

検証・浦和電車区事件の真実 No. 36

民主化闘争情報 号外] 2008 年 7 月 28 日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合)

第36回 Y氏の顔から頭に疱疹、激痛が走る！

2001 年 6 月 5 日、Y 氏（当該事件被害者）は浦和電車区 I 区長から「日勤業務を続けなければならない理由を文書にして提出してくれ」と言われ、仕方なく「精神的に不安定な状態があり、今後の精神状態をみて運転業務に復帰するという方向で考えているので、6 月末まで日勤業務を続けさせていただきたい」という書面を提出した。

極度のストレスで帯状疱疹^{たいじょうほうしん}が発症

区長は 6 月中旬頃、この書面を見て、Y 氏に「7 月から乗務してもらいたい。支社からも乗務させるよう言われている。いつまでも日勤というわけにはいかないから、7 月から乗務するように」と話をした。Y 氏は、いったんはこれを承諾した。

しかし、本心では、とても運転業務に復帰できる自信はなかった。乗務することを考えると、大潤らに繰り返し激しく脅された場面が鮮明に脳裏に浮かんできて、鼓動は高まり、息苦しくなった。「また運転すれば必ず脅される…」と、恐怖心がますます募っていった。

そのような精神状態で仕事を続けるうちに、Y 氏の顔の右半分から頭に掛けて、水疱瘡のようなブツブツができた。はじめのうちはチクチクする痛みだったが、次第に、強烈な痛みに変わり、とても我慢ができなくなった。

6 月 18 日、Y 氏はたまたま近くの皮膚科の病院で診察を受け、治療をしてもらった。病名は「帯状疱疹（たいじょうほうしん）」だった。医師からは、神経の根元に潜伏しているウイルスが、極度の疲労や精神的なストレスが溜まると発症する病気であると説明を受けた。

これまで再三にわたって JR 東労組浦和電車区分会の役員らに徹底して糾弾されてストレスが蓄積し、そのうえで、7 月から乗務するよう指示されたことで、さらに精神的に追い込まれたことが原因で病気が発症したことは明らかだった。

Y 氏の病状は悪化し、頭痛でとても仕事に行けない状態になったため、6 月 19 日から 26 日までは病気休暇で会社を休んだ。処方してもらった薬の効果で、病状は徐々に快方に向かったが、自宅で静養する Y 氏は悔しくてならなかった。

いずれ乗務させられる…と思い悩む

Y 氏は 6 月 27 日から出勤したが、痛みは治まったものの、顔から頭にまだブツブツが多く残っており、制帽をかぶることもできなかった。そして、この病気のために、7 月も引き続き日勤業務を行うことになった。

しかし 7 月は日勤となったものの、いずれ運転業務に戻らなければならないと思うと、Y 氏の不安と恐怖はさらに高まっていった。病気になったことで、ますます弱気になった。自宅でも職場でも、鬱々と思い悩む日が続いた。この頃の Y 氏には、まったく笑顔が消えていた。こうした中、ついに、Y 氏に退職を決意させるできごとが発生したのである。（次号に続く）